
俺の足に賭けて

キー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の足に賭けて

【Nコード】

N 8 6 3 5 P

【作者名】

キー

【あらすじ】

学校内最速の、常時笑っている少年と。

取り得がないと思っている幼馴染の少女の。

恋物語。

(前書き)

あけまして。おめでとunggざいます。

この、『俺の足に賭けて』は連載中の『MY STORY』とは全く関係がありません。

お正月と言うことで、調子に乗って短編を作ってみました。

完成度は低いと思われます。

自分が書きたいことを書いただけですから。

それでも、興味がある方は先に進んでください。

あなたに、ゴールテープを張って待っている人は居ますか？

短編 俺の足に賭けて

「速ッ！」

「あーあ、開始十秒でビリから一位だし」

「仕方ないよ、相手が光輝だもん」

「独走じゃねえか。逆につまらん」

と、三者三様の意見を述べる私のクラスメイト達。

皆が話しているのは、白団の選抜リレーのアンカーについて。

彼の名は、真白光輝。

私のクラスメイトにして、幼馴染だ。

中学二年生。

「もうゴールしてるし」

「笑顔でゴールかよ」

「先輩方が可哀想だね」

聞いている通り、足が速い。

彼は四百メートル走で全国大会に出場している。

入賞こそはしていないけど、それなりの実力を持っている。

学校内では、相手になる選手がいない。

そういう訳で。

「今年は白団優勝か」

「手加減しろ!!」

「今年もビリ……か」

他の団から不評が大発生する。

うちの学校の体育大会は走る種目が多い。

つまり。

まあ、光輝の入るチームが圧倒的に有利な訳。

「お疲れ」

「サンキュ」

余裕顔で控え場所に戻ってくる光輝。

勿論、白団メンバーが黙ってるはずも無く。

「よくやったー!!」

「優勝は目前だ!!」

「お前のお陰だ!」

と、大盛り上がり。

しかし、当の本人は。

「……疲れた」

「その顔で言っても説得力ないよ」

「ばれた?」

「ばれたって、何それ?」

シシツと笑う。

太い眉毛が釣り上がる。

真っ黒くて、男子にしては長い髪。

細い眼。

私が言うのもなんだけど、イケメンではない。
正直に言う。

ブサイクだ。

「俺、いま酷い事言われた気がする」
「気のせいだよ」

なんて言いながらブルーシートに腰掛ける。

隣に私も腰掛ける。

そんなブサイクな光輝だけど、何故か女子にはモテる。

足が速いだけのこんな男の何処がいいんだろうか？

理解不能だ。

「なんだか胸が痛いんだけど？」

「疲れたんだよ」

光輝は告白をされたことが結構ある。

何故私知ってるかは、恥ずかしげも無くこいつが私にペラペラと喋るからだ。

恥じらいを持て。

断る理由については、教えてくれない。

誤魔化される。

「ん？」

「（……何、あの女）」

「（光輝君にベツタリじゃない）」

何人かの女子のひそひそ話が聞こえてきた。

思わず、ため息を吐く。

とにかく、これ以上こいつの横に居ると良くない。

タイミングよく。

「おい、光輝！ 次も頼むぞー!!」

「分かりました。頑張ります」

団長がやって来たので、そそくさとその場から離れた。

「あー疲れた」

「嘘付け、全然全力じゃなかったくせに」

「……」

幼馴染、つまり家も近い。
と、言うか隣だし。

「全力じゃないんじゃない」
「え？」

「全力が出ないんだ」

隣を歩く光輝の顔を覗き込めば、暗かった。

それはもう、どよーんと効果音が聞こえてきそうなほどに。

「調子、悪いの？」

「まあ、良くは無い」

何だかんだ言って、プライドが高いのだ。

体育大会だろうが。

全国大会だろうが。

幼稚園児との徒競走だろうが。

手を抜かない。

いや、足を抜かない。

全部、本気。

だから、調子が悪いときに言い訳ができない。

「ふーん」

「ふーんって何だよ、ふーんって」

「だったら、一つご褒美をつけてみる？」

は？、と間抜けな顔で聞き返してくる光輝に。

ものすごく意地悪い顔でこう言ってやった。

「次の大会で優勝したら、デートしてあげる」
「ッッ!？」

なんちゃってー、冗談ですって言おうと思ったら。

光輝が私の手を取って。

「本当か!？ 本当なんだな!！」

「え!？ ちよつと」

「男に二言は無いよな!！」

「私は女!」

え？

何この展開。

何でこいつ、こんなにやる気に満ちてるの？

私の計画が音を立てて崩れていく。

「うおっしゃー!! 頑張るぜー!」

「……馬鹿、単純」

まあ、いいや。

女にだって、二言は無い。

夕焼けの下、自分の言った事を『ちよつぱり』後悔した。

「あ」

「あ」

あわてて手を振りほどく。

「わ、悪い。何かかつこ悪かった」

「べ、別に。練習頑張つて」

「ああ」

そこからは、沈黙。

このとき、家が隣であることを憎んだ。
同じ道を通らなきゃなんだもん。

朝から、空が泣いている。
ジメジメして、鬱陶しい。

体育大会の振替休日で今日は休みになっていた。

ちなみに、昨日の体育大会は白団が優勝している。

まあ、当然って言えば当然なんだけど。

「うーん、こんなに朝っぱらから誰？」

そんな有意義な休日にこんなに速く、起こされたのかと言えば。

友達からの電話だった。

ケータイの着メロを朝一番に聞かされる羽目になった。

「もし」

もし、朝っぱらから何？

って言おうとした。

だけど、言い始める前に。

「莉那！！」

「ちよっと、落ち着いて、どうしたの？」

酷く焦ったというか、困惑した美優からの声によって。
言葉によって。

私の意識は覚醒した。

「光輝君が！ 事故ったの！！」

え？

「美優！！」

私は市内の比較的大きな病院で友達の姿を見つけた。

「どういうこと！？」

隣の、光輝の家に行っただけ、ご両親は居なかった。

何故なら。

この病院に居るから。

「えっと、あのね、」

光輝が、事故った。

その言葉が、私の頭をぐるぐると回っていた。

「取り合えず、命に別状は無いみたい」

「良かったー」

肩の荷が降りた。

あの馬鹿、心配かけやがって。

とことん言及してやる。

「だけど……」

「え？」

「暫く、走ることはお預けだって」

え？

ちよつと待って！

それじゃあ、あいつ。

「暫くって？」

震える声で、尋ねた。

「半年くらい」

「そ、そんなに？」

半年って……。

あいつが堪えられるわけが無い。

だって、あいつは。

走ることしか、能がないから。

「どういう理由で？」

「それが、昨日の真夜から、今の今まで一人で走ってたみたい」

そんなに夜遅くに？

どうして？

「やたらと張り切ってたみたい。それで、」

あ。

気付いた。

わたしの、所為だ。

私が、あんな事言っただからだ。

言及してやるって、私何言ってるの。

私が、悪いんだ。

「莉那？　だ、大丈夫？」

「う、うん」

「お見舞い、いこっか」

「……うん」

私は、最低だ。

「どうぞ」

「おはよう、光輝くん」

「ああ、おはよう」

三階の個室に光輝は居た。

ベットの上に倒れながら。

私たちを見て、頭を上げる。

「よっ、美優、莉那」

「お、おはよう」

光輝が太陽みたいな笑顔でこっちを向いてきた。

痛かった。

辛かった。

ちっとも、暖かくなんか無かった。

「ねえ、光輝ごめんね。わたしの所為で」

「は？」

「私があんなこと」

私が頭を下げる前に、笑い声がした。

終夜が笑っていた。

凄惨な笑みを浮かべて。

「お前が誤る理由なんてないだろ」

「で、でも！」

「あんなの、信じてねえよ」

「え？」

「別に、あんなこと言われたから張り切ってたわけじゃねえよ」

そう、凄惨に笑っていたんだ。

畳み掛けるように光輝は言う。

「そんな事のために、頑張るわけ無いだろ？」

「……」

「俺の不注意」

「最低ッ！！」

気がつけば、光輝の顔が横を向いていた。

私が頬を引つ叩いたから。

「あんななんか、知らない」

「ちょっと、莉那！」

どこかかと、病室を出て行った。

廊下を走らないで下さいと注意された。

だけど、止まらなかった。

止まりたく、無かった。

「ごめんな、莉那」

凄惨な泣き顔で少年は呟いた。

私が馬鹿だった。

何、調子こいてんの、私。

そうだよ、私だって冗談のつもりだったんだよ。

それなのに、それなのに！

どうして。

（こんなに、胸が痛いのに）

涙が止まらないの。

私の所為なんて。

本当に、馬鹿だ。

自惚れにも、程がある。

あいつにとって、私は。

ただの、幼馴染。

気が付けば、結構遠くまで来ていた。

町のはずれの方に。

一心不乱で、走り続けていた。

でも、光輝だったらきつと、もう県外まで走って行っちゃってる。

私には、なんにも無い。

急に、そんな考えが浮かんできた。

光輝には足がある。

俊足の、足が。

私には？

（何にも、ない）

無性に泣きたくなってきた。

いざ、泣こうとすると。着メロが鳴り響いた。

嫌々、ケータイを取った。

電話の主は、『斉藤美優』。

「もし」

もし、後にしてっって言おうとして。

またも、言い終わることはなかった。

「莉那！」

今朝よりは落ち着いてたけど。

逆に、怖かった。

言葉と、感情がずれている。

「光輝が、光輝が」

次の瞬間、信じられない単語を聞いた。

「死のうとしてるの!」

元来た道に戻る羽目になった。

あいつの所為で。

走って、病院を目指す。

（光輝が屋上から飛び降りようとしてるの!）

あの馬鹿。

何してんの。

（『足がなくなったら、俺にはもう何にも無いって』って言って
ふざけるな、と心で叫ぶ。

走るだけ取り得？

私は、知っている。

光輝のいい所なんか。

嫌と言うほど知ってる。

神さま、お願いします。

今だけ、私の足を。

速く、して下さい。

間に合わせてください。

心の中で、祈りながら一心不乱に駆けた。

アスファルトが、足に衝撃を和らげることなく運んできた。

「光輝！」

重たい屋上の扉を開ければ、光輝がいた。

ひどく、不思議そうな顔をして。

私の登場に、驚いていた。

「ど、どうした？ そんなに息荒げて」
「どうしたって、それは」

途惑っている様にも見えた。

私の登場に、困惑してる。

それでも、笑っていた。

「光輝、死のうとしてるんでしょ」

蚊の泣くような声で、言った。

「お前は、何でも分かっちゃまうんだな」

「うん、だって、幼馴染だもん」

自分で言っで、嫌になった。

幼馴染。

「ああ、死のうと思ってた」

「何で？」

「俺の足が、もう使えないから」

「半年、半年我慢すれば」

「それじゃあ、間に合わない」

あたり前だけど。

半年もスポーツができなければ、体は鈍る。

陸上競技なんて言ったらそれこそ一日休むだけで大きな影響が出るのに。

半年。

六ヶ月。

それは、終わりを意味していた。

「俺の能は走ることだけなんだよ、走れなかったら、ただのカスだ」

やっぱり、凄惨に笑いながら言った。

走ることしか、能が、無い。

魅力が無い。
特徴が、無い。

「優しい所」

「え？」

「私が傘を忘れた時、一緒に入れてくれた」

耳まで真っ赤になりながら。

気が付けば、口に出してた。

「真面目な所」

どんなに、下手糞で、苦手なスポーツでも。

全力で取り組む所。

勉強も。

「かつこいい所」

自分が正しいと思っている事は、何が何でも貫き通す。

相手が間違っていると思ったら、本気で間違いを正す。

『誰にでも』、優しい所。

その中で。

「私に、元気をくれる所」

どんなに、落ち込んでいても、彼は笑う。

凄惨な、笑み。

凄く、悲惨な笑みを浮かべる。

それが、痛い。

それを見ると、私が笑ってあげなきゃって。

そう、思う。

「辛かったらさ、泣いていいんじゃないかな」

「え？」

「無理に笑わなくても、いいんだよ」

それでも、駄目なら。

「私が、私でよければ一緒に泣いてあげる」

「ツツ!!」

私の背中に腕が周った。

私よりも背が大きくて、力も強いからちよつと苦しい。

でも。

「馬鹿、じゃねえの！ 普通、一緒に笑って、くれるだろう」

「残念、だけど、私は光輝みたい、に笑え、ないんだよ」

笑えない。

あんな、笑みは出来ない。

そんな顔をする前に、きっと涙が出てきちゃう。

「かつこ、悪いな、俺。ごめん」

「うん、知ってるよ」

知ってる。

光輝はかつこよくない。

「でも、いいじゃん」

「ああ、どうでもいい」

彼は、こう言った。

「お前が、莉那が居てくれるなら、かつこ悪くたっていい」
「え？」

「俺、死のうと思ったんだ。死んでやるって」

泣きながら。

悲願するよつに。

凄惨に泣きながら。

言葉を続ける。

「そしたらさ、怖くなったんだ」

「死ぬのが？」

違う、って。

「お前に、会えなくなるのが」

「……」

「ちっぽけで、自分勝手だよな、俺」

何言ってるんだか、俺と。

彼は泣きながら言った。

「待ってるから」

「え？」

「私、待ってるから」

「……ああ、全力ダッシュで追いかけてやる」

んで、隣に並んでやるって。

彼は、笑みを浮かべて言った。

その笑顔は、凄惨じゃなかった。

「本当？」

「ああ、俺のこの両足に賭けて」

俊足の、足に賭けて。

「じゃあ、安心」

安心して、待ってる。

その足なら、私の元まであっという間に来てくれる。

「莉那、俺お前のことが」

「だ、駄目ッ！」

「え？」

「まだ、駄目だよ」

クスリと笑って、言っただけなら。

「分かった」

光輝に、凄惨な笑みを浮かべられた。
夕日を背に、涙目で、笑っていた。

ああ、やっぱり光輝は笑うんだ。

ごめんね。

でも、絶対待ってるから。

「さっきの、お返しだ」

「え？」

「俺が弁当忘れたら分けてくれる優しい所」

「ちょ！？」

「人の優しさをしっかり受け止める所」

「は、恥ずかしいからやめてよ……」

「『誰にでも』、優しい所」

「……拗ねてる？」

「別に」

「嫉妬しちゃってー」

「してない」

「じゃあ、明日から光輝だけ特別に優しくしてあげよっか？」

「マジかッ！ 本当だな！」

「嘘だよ」

「……最低だな」

「じゃあ、」

私は、凄惨な笑みでこう言ってやった。

「あんたも私を特別扱いしてくれたら、私も考える」

光輝は、驚いた顔をした後。

「俺が、優勝したらだな」

「うん、待ってるよ」

実を言えば、今すぐ聞きたい。

あの、続きを。

だけど。

（両足に賭けられちゃったから、しっかり待ってないとだよね）

彼がランナーなら。

私は、ゴールテープがいい。

一番に、彼の喜びを分かち合いたい。

あんたを、ゴールで待ってるから。

私を、誰にも渡さないでよ？

あんたが、一番にテープ切るんだから、と。

心で、言っておいた。

（後書き）

完全に勢いで書いたので、ちょっと無理やりすぎるかも知れませんが、もし、読み終わってあなたの心にゴールテープが見えたのなら。

まだ、はるか遠くで見えなかったとしても。
はたまた、ゴールなんてなくても。

走り続けることを、やめないで欲しいと思います。

きっと、誰かが待っています。
何かが待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635p/>

俺の足に賭けて

2011年1月9日04時13分発行